

宮古市田老地区



2011年3月12日 右手の太平洋から襲来した大津波は巨大防潮堤を乗り越え、商店街や住宅を破壊した



11年6月20日 町を覆っていたがれきは撤去され、復興に向け歩みだした



14年6月13日 右奥の山林が切り崩され、三王団地の造成工事が進む



17年5月3日 左手の土地区画整理エリアは野球場や観光案内施設が完成。右奥の三王団地では住居の建設が進む



21年2月9日 防潮堤左奥の道の駅エリアは台風19号豪雨で被災したが、復旧した

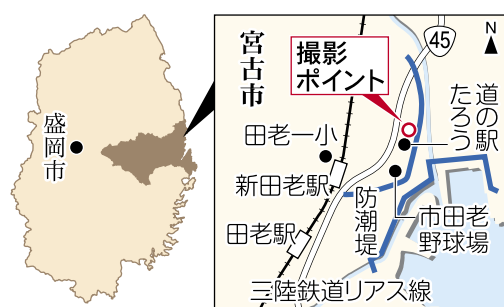


熊谷 宏彰(まがひい・ひろあき) 震災時は報道部勤務。奥州支局長を経て20年4月報道部第一部長。43歳、盛岡市出身。

岩泉方面から三陸道を通って宮古市田老の中心部に入った。到着して真っ先に防潮堤に上り、360度の風景を確かめる。海抜14・7びの新防潮堤が完成間近。10年前のあの日を振り返れば、こんな青空が広がり、そして寒かった。

かつて宮古支局で勤務した土地があり、志願して田老の取材に向かった。国道45号が寸断され、岩泉町から山道を通って到着したのは2011年3月12日。密着していた商店は無残に破壊され、異様な静寂、ガス漏れの臭いがした。「盛岡まで乗せてほしい」。波をかぶったであろう数人が取材車に寄ってきた。自分は、何をすべきなのか。しほし状況判断に迷ったのを思い出す。

今年2月、1年ぶりに訪れた現地は、三陸道田老真崎海岸―宮古中央が開通し、沿岸南部や盛岡方面との交通の便が向上した。災害公営住宅のそとはには三陸鉄道新田老駅と市田老総合事務所が入る施設が完成。3階から駅ホームに出ると田老一小のグラウンドが目前に広がる。道の駅たろうのエリアに向かい、山長商店を営む山本悦治さん(50)と再会した。中心部に営んでいた自宅兼店舗が津波に流され、共同仮設店舗を経て18年に本設を再建。以前は両親も店に勤めていたが、再建を機に引退した。現在は妻と二人三脚で切り盛りし、高齢者の生活を



被災地を歩く

10年目のいま～本紙記者ルポ

—12—

新しいまち 活力手探り

ルズ禍が襲った。だが、心が折れずに乗り越えてきたのは「地域の皆さんのおかげ。豪雨の時は自主的に清掃に駆けつけくれた」との感謝を胸に商業に励む。道路を挟んで反対側に立つ田老町漁協で小林昭栄組合長(71)



再建した店舗前に立つ山本悦治さん。住民生活を支える決意を強くする＝宮古市田老

に近況を聞いた。震災後、基幹の水産業を立て直すため借り入れた1億9千万円は経営努力で5億1千万円まで減ったが、主力魚種の不漁に加えて、単価の高いアワビも深刻な不漁。震災前年(13年)に39あった水揚げは直近では9トンほどに減少した。組合員数も震災前の707人から490人に減る厳しい状況にあつて、資源保護などに取り組む漁業者の水産規格「マリン・エコラベル・ジャパン(MEJ)」認証を取得するなど、特産・真崎わかめを中心とした付加価値向上に活動を求める。漁協が傾けば、地域を守れない。魅力的な水産物を出し、観光客が来られるように頑張る」と力強く語った。

教訓

防潮堤の上 伝承継続

「学ぶ防災」ガイドの小幡実さん



これまでの取材では必ず、X形の巨大防潮堤の交点に上り、地域で奮闘する人たちのまじみの変化を写真に収めてきた。さらに、ここを拠点とする「学ぶ防災」は教訓伝承と交流人口拡大に重要な役割を担い、経過を注目してきた。

「以前は巨大防潮堤があるから大丈夫と思っていた」が、自然の脅威は想像力を上回った。防潮堤は破壊され、無力だったとの見方もあるが「なければ全て流され、復興もなかった」と小幡さんは言い切る。

宮古市田老地区 10年の歩み																					
2011年 3月11日	東日本大震災	9月	共同仮設店舗「たろうちゃんハウス」がオープン	12年 4月	防災ガイド「学ぶ防災」スタート	15年 11月	田老まちびらき記念式を挙行	16年 4月	震災遺構「たろう観光ホテル」の一般公開始まる	17年 3月	防潮堤の第2線堤のかさ上げ工事完了	18年 3月	三陸道田老真崎海岸―岩泉龍泉洞開通	4月	道の駅たろうが全面オープン	19年 10月	台風19号豪雨で道の駅エリアなどが冠水	20年 5月	三陸道宮古中央―田老真崎海岸開通	7月	
																					

from 3.11

東日本大震災10年 あなたと、生きていく。